



チャーチル杯創設の経緯 ~ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジの資料から~

神崎高明(経済学部教授、ESS顧問)

1. チャーチル杯の誕生

関西学院大学英語研究部(ESS)は英国元首相の Sir Winston Churchill (1874-1965) から許可を得て、高校生を対象に、1958年よりチャーチル杯争奪スピーチコンテストを毎年行っている。高校生を対象にしたコンテストは、チャーチル杯が最初というわけではなく、このコンテストの前にも、戦前から ESS は高校生を対象に英語のスピーチコンテストを行っていた。学院の『開校四十年記念 関西学院史』および『関西学院高等商業学部二十年史』によれば、関西学院 ESS は第1回中学校英語懸賞雄弁大会を1928(昭和3)年に開催している。戦後になって、ESS は1950年に第1回京阪神中学・高等学校英語弁論大会を開き、中学・高校の生徒に英語弁論の機会を提供した。この大会は2年後の1952年に規模を拡げて、毎日杯全国高等学校英語弁論大会となった。

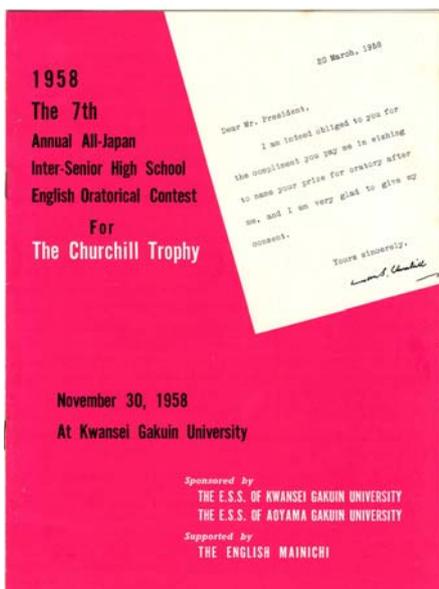


第1回毎日杯全国高等学校英語弁論大会(1952)

ところが全国大会と銘打っていても、この大会の参加校はほとんどが近畿以西の高等学校であった。そこで、文字通り関東も含めて全国規模の大会にし、一層質の高い大会にするために、1958年の佐保正 ESS 部長の時代に二つのことを実施した。一つは、青山学院大学 ESS と共催することによって関東の高等学校の参加を促すことであった。さらに、もう一つは、当時、著名な演説家として世界的にその名を知られていた英国の元首相 Sir Winston Churchill の名前を冠にいただき、チャーチル杯争奪英語弁論大会とすることであった。『関西学院大学 ESS100年史』によれば、チャーチルに手紙を書いて、名前を借りるというアイデアを思い付いたのは OB の谷本陽蔵氏とのことである。この谷本氏のチャーチル杯の発案を実行に移し、青山学院との共催とするという二つの課題に中心的に取り組んだのは ESS でスピーチの委員長であった山口宗弘氏であった。

青山学院との共催の話は順調に進んだが、問題はチャーチルにどのように接触するかである。またチャーチルがはたして承諾をしてくれるかという心配もあったが、とにかくにも手紙を用意することになった。

佐保部長の英文の手紙は、当時の関西学院長の加藤秀次郎氏の推薦状を付け、大阪総領事館を経由してチャーチルに送付された。大阪の英国総領事館への橋渡しは、OBであり、当時英文毎日の記者であったトミー植松氏を通して行われた。返事は、送付後2か月ほどして加藤院長宛てに総領事館経由で届いた。チャーチルの署名付きで快諾の手紙だった。これを受けて、毎日杯全国高等学校英語弁論大会は1958年の第7回大会からはチャーチル杯争奪全国高校生英語弁論大会(The 7th Annual All-Japan Inter-Senior High School English Oratorical Contest for the Churchill Trophy)として新たに出発した。この年、初めて関東予選を青山学院大学で行い、本選を関西学院大学で行った。大会のプログラムにはチャーチルからの承諾の手紙が印刷された。これ以降、チャーチル杯の本選は関西学院大学と



チャーチル杯(1958)のパフレット表紙

青山学院大学で交互に行われ、今年の秋には第 61 回目の大会が関西学院大学で行われる予定である。以上が、『関西学院大学 ESS100 年史』に掲載された文書および ESS・OB からの情報に基づいてまとめたチャーチル杯に関する経緯である。

2．紛失したチャーチルからの手紙

ところで、1958 年に届いたチャーチルからの手紙であるが、所在は不明である。当時の院長だった加藤秀次郎氏宛に届いたものであるから、学院が保管しているのではないかとということで、『ESS100 年史』を編集していた 1997 年頃、私の方から学院秘書室に打診し、探してもらったことがあった。しかしながら、その手紙は出てこなかった。当時の秘書室の説明では、1969 年の大学紛争の時、学院本部が全共闘に占拠され、多くの書類が紛失しており、チャーチルからの手紙も、その時、紛失した可能性があるとのことであった。手紙自身は見つかっていないが、その手紙は ESS が当時発行していた英字新聞である *The KG Times* の 1958 年 4 月発行、第 9 号に掲載されているので、その内容を確認することができる。手紙の内容は以下の通りである。

Dear Mr. President,

I am indeed obliged to you for the compliment you pay me in wishing to name your prize for oratory after me, and I am very glad to give my consent.

Yours sincerely,

Winston S. Churchill

ESS にとって、また学院にとっても貴重な資料といえるチャーチルの手紙は、数十年前の話であり、平成の時代の今、チャーチル元首相に手紙を書いたこと、そしてチャーチル自身から返書が届いたことなどは、ESS の OB の間でも、昔話として語り継がれるだけのものとなっていた。

3．英国からの便り

2003 年 7 月のことである。一通の手紙が関西学院の秘書室に届いた。英国の Gale 出版社の社長 Mark Holland 氏と Sir Winston Churchill Archive Trust の代表の James Joll 氏の連名の手紙だった。当時、学長室勤務だった宮坂美鈴さんよりこの手紙に関して ESS 顧問の私に連絡があった。手紙の内容は、チャーチル関連の手紙や資料は、英国ケンブリッジ大学のチャーチル・カレッジのチャーチル・アーカイブ・センター(Churchill Archives Centre)に保存されているが、そこにある 100 万通以上の手紙をマイクロフィルムの形で保存予定であり、ついては、関西学院大学に関する若干の手紙類 (a small number of these documents from Kwansai Gakuin University, Uegahara, Japan) をマイクロフィルム化する許可を得たいとの申し出であった。マイクロフィルム化された暁には、要請があれば関係資料のコピーを差し上げるとの一文もついていた。宮坂さんは学生時代本学の ESS に所属していたので、チャーチル杯のことを思い出し、関学に関する手紙は ESS のチャーチル杯関連のものではないかと思い、私に手紙のコピーを届けてくれたのである。その手紙を読んで、私はチャーチル・アーカイブ・センターにある関西学院大学関連の手紙の中にチャーチル杯に関連する手紙が含まれていることを確信した。そこで、ESS としては、チャーチル杯関連の手紙は一切手元に残っていないので、もしマイクロフィルムの形で保存されるならば、チャーチル杯創設の経緯が明らかになるので、関西学院大学 ESS 関連の手紙のマイクロフィルム化には大賛成である旨を大学に伝えた。これを受け学院秘書室から、関西学院関連の手紙のマイクロフィルム化に同意するという連絡が先方に対してなされた。

4．ケンブリッジ大学訪問

その後、私の方から、もし関西学院大学 ESS 関連の手紙がマイクロフィルム化されたならば、知らせてほしいという連絡を Gale 社に入れたが、何の返事もないまま、数年が過ぎた。ケンブリッジ大学のチャーチル・カレッジのチャーチル・アーカイブ・センターのマクロフィルム化も徐々に進んでい

ることは、センターの資料検索システムを見てわかったが、関西学院大学 ESS のチャーチル杯の手紙は、その後数年間ネット検索をしても見つからなかった。思い出したように 2010 年頃に、一度、検索を試みたが、やはり駄目だった。そうこうしているうちに、たまたま 2012 年の夏に 8 年ぶりに英国に出張する機会があり、ケンブリッジまで足を伸ばし、チャーチル・カレッジのチャーチル・アーカイブ・センターを訪問してみようという気になった。久しぶりに、ネット検索を思い立ち、検索を試みると、Kwansei Gakuin University, Uegahara, Japan, on naming of English Oratorical Contest after him という文字が眼に飛び込んできた。チャーチル杯の手紙のマイクロフィルム化が完了していたのである。早速、アーカイブ・センターの学芸員の Sophie Bridges 氏に E-メールで連絡をとり、チャーチル杯関係の資料を今夏、調べにいくので宜しくと伝えたとこ、指定の日に終日リーディング・ルームを自由に使えるようにしておきます、との親切なメールをいただいた。そこでロンドンオリンピック直前の 7 月初旬にケンブリッジを訪問することにした。ケンブリッジ大学には社会学部の岡田弥生教授と商学部の伊藤正範准教授がダーウイン・カレッジとクレア・ホールの客員教授としてそれぞれ滞在されていたので、お二人にチャーチル・カレッジまで案内をしていただいた。

チャーチル・カレッジはケンブリッジの西北に位置し、観光客がひしめくトリニティー・カレッジやキングス・カレッジなどのケンブリッジ大学の中心部から、少し離れたところにあるせいか、静かでゆったりしており、美しい芝生の中に校舎が点在していた。チャーチル・アーカイブ・センターはその中の Jock Colville Hall に隣接する建物の 2 階にあった。センターの受付に行くと、名前を名乗る前に、「ようこそ。待っていましたよ。Sophie は席をはずしているけど、彼女からあなたのことは聞いているよ」と声をかけてきたのは、ベテランの学芸員の Andrew Riley 氏であった。早速、マイクロフィルム・リーダーのあるところに案内されリーダーの前に座らされた。「あなたが希望していた照会番号の箇所を開けておいたから」と言われて、リーダーを覗いてみると、300 枚ほどの手紙があった。その中から Churchill 杯に関する手紙を探すとという作業をすることになった。これはかなり時間がかかるなと一瞬思ったが、照会番号の最後の部分に関西学院大学 ESS 関連の資料があることをネットで前もって調べていたのを思い出し、最後のページまでスクロールしてみると、案の定、Kwansei Gakuin の文字が現れたので、「しめた」と思いながら、手紙の内容を確認した。チャーチル杯関係の手紙はせいぜい 2、3 通だろうと思いつつ、ページを逆戻りさせると、Kwansei Gakuin の文字が次々に現れ、最終的にはチャーチル杯に関する手紙が 20 通もあったことは嬉しい驚きであった。早速、20 通分のコピーを取ってもらい、その日のうちにロンドンに引き返し、夜、ホテルで 20 通の手紙を詳しく読んだ。



チャーチル・アーカイブ・センター外観



チャーチル・アーカイブ・センター入口

5 . 関西学院大学とチャーチルとの往復書簡

手紙は関西学院大学側からチャーチルへが 8 通、チャーチル側から関西学院大学へが 6 通（そのうち、チャーチルからが 3 通、私設秘書からが 3 通）、チャーチルの私設秘書からチャーチルへが 4 通、チャーチルの私設秘書から英国外務省へが 1 通、英国外務省からチャーチルの私設秘書へが 1 通である。

なお、この中で、関西学院大学側からチャーチルへの 8 通は原本をマイクロフィルム化したもののコピーであり、それ以外の手紙は控えをマイクロフィルム化したもののコピーである。

関西学院大学 ESS からチャーチルへの最初の手紙は、1958 年 2 月 23 日付のものであった。差出人はその年の ESS 部長の佐保正氏とスピーチ担当委員長の山口宗弘氏であった。手紙の内容は、関西学院大学 ESS は 1952 年以来、日本の若者の英語力の向上を目指して、高校生を対象に英語のスピーチコンテストを実施しているが、そのコンテストを今年の 11 月にある第 7 回大会より、名演説家として夙に名が知られている Winston Churchill 氏の名前を冠した Churchill Trophy コンテストにすることを認めて欲しいというものであった。この手紙には、当時の関西学院の院長であった加藤秀次郎氏によるチャーチル宛での英文の推薦状(1958 年 2 月 23 日付)が付けられていた。その中で、加藤氏は学生たちが提案しているチャーチル杯の実現に力を貸してほしいとチャーチルに訴え、チャーチル杯が実現すれば、日本の若者の英語学習意欲の向上にも大いに益するところがあるであろうと述べている。

チャーチル側で連絡に当たったのは Sir Anthony Montague Browne であった。¹⁾彼は英国外務省に勤務後、チャーチルの私設秘書(private secretary)となり、チャーチルの最後の私設秘書として著名な人物であった。チャーチルの晩年の側近であり、チャーチルと常に行動を共にした人物である。1955 年に首相の座を降りてから、チャーチルはしばしばロンドンと南フランスを行き来していた。南仏では、特に、保養地として知られるロクブリュヌ・キャップ・マルタン(Roquebrune-Cap Martin)のラパウザ(La Pausa)で過ごすことが多かった。²⁾ラパウザで静養中のチャーチルへの手紙(1958 年 3 月 1 日付)の中で、Browne は日本の大学の ESS が弁論大会に The Winston Churchill Trophy という名前をつけたいと言ってきているが、この申し出は大変丁寧な英語で書かれており、認めても何の問題もないと思うとチャーチルに具申している。さらに、Browne は同日付の外務大臣の私設秘書である Richard J. Langridge への手紙の中で、関西学院大学からの申し出に関してチャーチルは何の異存もないが、もし外務省のなかで異存があるなら知らせてほしい、と連絡している。それに対して、外務省の P.C.M. Alexander から、Browne に 3 月 10 日に返事が届いた。その中身は、関西学院大学は立派な(reputable)大学であるので、英国外務省としてはまったく異存はない。ただし、東京の大使館に意向を聞き、異存がなければ大使館を通してチャーチルの承諾の返事を送ることにしたい、とのことであった。東京の大使館に異存があるわけではなく、3 月 20 日付の手紙で、Browne は ESS 部長の佐保氏に、チャーチル杯を承諾したこと、加藤院長に承諾の手紙を送ったことを伝えている。そして、1958 年 3 月 20 日付で、チャーチルから加藤院長宛のチャーチル杯承諾の手紙が領事館経由で送付されてきた。その手紙が *The KG Times* に掲載された上記の英文である。チャーチルからの手紙に対して、佐保正部長とスピーチ担当の委員長である山口宗弘氏から、チャーチル氏の名に恥じない大会にしたいとの手紙が、4 月 2 日付でチャーチル宛に送られた。大会終了後の 1959 年 1 月 12 日付の手紙で、山口氏からチャーチルに、大会のスケジュールが詳しく紹介されるとともに、大会は青山学院大との共催で行われ、近畿地区、関東地区、その他の地区から多くの高校生が参加し、成功裏に終わった旨を報告している。

筆者などは、ここで、関西学院大学 ESS とチャーチルとの手紙の交換が終わったと思っていたが、そうではなかった。それ以降も、ESS はチャーチル側と連絡を取り合っていたのだ。アーカイブ・センターで、1960 年 9 月 25 日付の小宮孝院長のチャーチルへの手紙、および同日の日付の ESS 部長伊東太一氏とスピーチセクション・チーフの有田正行氏の連名でチャーチルへ出した手紙が見つかった。その中で、関西学院大学はチャーチルに対して大会参加高校生に向けてメッセージをもらいたいという依頼を行っている。10 月 6 日にチャーチルの秘書の Browne はメッセージの原案を作り、これでよいかという手紙をチャーチルに出している。その結果、原案どおりの文章が、チャーチルより関西学院に送られた。それが次の文章である。

I send my good wishes to those competing in the All Japan Inter-Senior-High-School English Oratorical Contest. It is most commendable and interesting that you should compete in this way and so add to your knowledge of the flowering of the English Language.

翌年の 1961 年 9 月 30 日にも、ほぼ同様の依頼を、小宮院長および山田紘一 ESS 部長と渡辺隆夫 チャーチル杯委員長の連名で行っている。それに対して、10 月 12 日に Browne は再び関西学院からメッセージの依頼が届いたこと、およびこの大会が英国と日本の関係に良い影響を及ぼすと考えられるので、メッセージを送ってはどうかとチャーチルに具申している。これにチャーチルも同意し、以下の 11 月 24 日付で次のようなメッセージが関西学院に届いた。

I send my good wishes to the competitors in the English Oratorical Contest. I hope that this competition will contribute to the knowledge of the English language in Japan and add to the understanding and friendship between our two countries.

チャーチル・アーカイブ・センターに残されているチャーチル杯の手紙は以上である。それ以降、関西学院大学とチャーチルの間で手紙の交換があったかどうかは定かでない。1962 年以降の手紙が残されていないのは、その頃からチャーチル杯が高校生対象の全国的なスピーチコンテストとして定着したため、チャーチルからさらにメッセージをもらう必要もなくなったためかもしれない。因みに、チャーチルは 3 年後の 1965 年に 90 歳で亡くなっている。

6 . 結語

関西学院大学とチャーチルの間での手紙の交換から感じることは、本学 ESS の学生たちのチャーチル杯創立に対する強い熱意とそれを強く支持した学院の協力である。また、チャーチルの私設秘書の Sir Anthony Montague Browne の献身的な協力である。Browne は、チャーチルの最後の私設秘書として活躍した人であるが、チャーチル杯の誕生にも大きく関わっていたことが、今回のチャーチル・アーカイブ・センターに残されていた手紙から初めて明らかになった。チャーチル杯は「日本の高校生の英語学習の向上のためだけでなく、日本と英国の間の理解と友情を深めるためにある」という Sir Winston Churchill のことばを、今我々は改めて考えてみる必要がある。

【注】

- 1) Sir Anthony Montague Browne は 1952 年からチャーチルの亡くなる 1965 年まで私設秘書であった。著書に *Long Sunset: Memoirs of Winston Churchill's Last Private Secretary*. Cassell, 1995. がある。
- 2) 1956 年から 5 年の間、チャーチルは毎年 2 回ロクブリュヌ・キャップ・マルタンで長逗留をし、その間、本を書いたり、絵を書いたりしている。この辺の事情は Gilbert, Martin. (ed.) *Winston Churchill and Emery Reves: Correspondence, 1937-1964*. U of Texas Press, 1997. が詳しい。なお、1958 年は 4 巻本 *A History of the English-Speaking Peoples* の最終巻が出た年であり、この頃チャーチルは本の執筆に多忙であった。そんな折、日本の大学の English Speaking Society からチャーチル杯の依頼が届いたのである。



ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジにて
- 2012 年 7 月 9 日 -

本件に関し、神崎先生は新聞社の取材を受けられ、次の 3 紙にて紹介されました。

『読売新聞』大阪版 9 月 25 日付朝刊

『毎日新聞』阪神版 10 月 9 日付朝刊

『朝日新聞』阪神版 10 月 13 日付朝刊

【学院史編纂室】